

浦 島太郎像のすぐ後方には、稲荷神社がある。乙姫さんよりも先の昭和22年に、柳平氏が設立した。京都の伏見稲荷大社から御分霊をいただき、参道には千本鳥居に做った69本の赤い鳥居がある。

くぐり抜けると、拜殿に続く階段があるのだが、ここで足が止まる。左右の灯籠の彫刻に、目を奪われるのだ。リアルで巨大な龍が絡みついていて、お稲荷様のお使いである白狐をも圧倒する、凄すぎる迫力。参道横には表情豊かな、これまた巨大な白い神馬像が5体ある。「競走馬よりも、一回り大きいと聞いております。ここにある像は、全て柳原さんがつくられました」。確かに灯籠には「岐阜市細畑柳原重蔵」



柳原重蔵氏による龍の灯籠

の文字が刻まれている。「祖父が招いて、うちに泊まり込みで作業されました。ここからですね、祖父が色んなものをつくり始めたのは」。

神社が設立した後につくられたのが、柳原氏による浦島太郎像だった。昔の写真を見ると、現在の像とは全く違う。特に亀だ。太い手足で大地を踏みしめ、正面を睨みつけている。まるで怪物のような迫力で、灯籠の龍に通じるものがある。

乙 姫像は、神社や浦島太郎像が出来て10年以上を経てから、建てられた。敷地を本格的に遊び場にしようと思ったのは、なぜなのだろう。「今でこそ、子どもの遊び場はたくさん



柳平氏がつくり直した2代目



初代浦島太郎像 柳原氏製作

ありますが、当時はプールも何もない。川幅が広いから、泳いで犠牲になった子どももいたと聞いています。だから、安心して遊べる場所を提供したかったのだと思います」。

浦島太郎の発想は、どこからきたのだら。海松新田には「大樽川の竜宮」という、むかし話が伝わっている。

昔、輪中の堤が切れて人や馬、家までもが流され、灯明測にすい込まれた。村人たちはそこにとらうろうを建てて火を入れ、近付かなくなつたために魚が豊富になった。ある時、泳ぎや魚獲りが得意な嘉助という若者が、神様に供える大きなコイを獲ってほしいと頼まれ、灯明測に綱を投げた。ところが、引こうとすると、強い力が伝わってくる。合点のいかなし嘉助が川に潜ると、身体が深く吸い込まれ、トンネルのようなものを潜り抜けた先に、明るく開けた広場があった。そこには、大きなコイやフナ、ナマス等を従えた、赤いひげをはやしたおじいさんと美しい女性が立っていて、「帰りたければ帰してやるが、再びここに来てはいけない」と言った。やがて嘉助は水面に押し上げられ、岸辺にたどりついた。村人たちは、灯明測には竜宮があると噂するようになったという。

この話が下敷きになっているのだ

が、殆どは柳平氏の手によるものだ。「当時は仁木農業協同組合長をしていましたので、朝4時に起きて、出勤するまで仕事場で乙姫の模型をつくっていました。私は毎朝、朝食を運んでいました」。

80歳を過ぎてからも向学心に燃えて読書に勤しみ、漢詩をつくったり、1人で海外旅行に行ったりとパワフルだった柳平氏は、乙姫さんのでっぺんまで上がって、自らセメントを塗った。「顔は祖父の好みです。大きくしたのは、目立たないと誰も見てくれないからでは。いまは木が大きくなったので、あまり見えませんが、昔は堤防の上から丸見えでした。うちに就職した人が初めて堤防から後姿を見てびっくりし



公園内に置かれている乙姫ポスト

うか。「うーん、どうでしょう。はつきりしたことはわかりません」と佳子さん。「生きものを大事にしよう、いじめはよくないよという気持ちからきているのでは。浦島太郎は亀を助ける話ですからね。大切なことを子どもに聞かせるには、皆が知っている話がいいと思ったのではないのでしょうか」。

実際、柳平氏は乙姫像をつくる前に京都、大阪、東京などの古本店に足を運び、色々な文献や絵巻物などを調べていたそう。



柳平氏がつくった乙姫の模型

て、あんな恐ろしい所に勤めるのかと思つたそうです」と笑う。

乙姫像を建てた後、柳平氏はさらに浦島太郎像をつくり直した。亀の手足が波の中に隠れ、浦島太郎の表情もやさしくなった。乙姫さんの顔とも、どこか似ている。

「祖 父は私欲がない人でした。人間としての器も大きかったですね」。乙姫公園には地元だけでなく、養老町、海津市、大垣市などからも子どもたちが遠足や社会見学でやってくる。佳子さんが話することもあるそうだ。

輪之内町産業課では公園に「乙姫ポスト」を設置し、メッセージや質問、相談などを書いて投函すると、乙姫さんから返事がきて、それをホームページに掲載するという企画をしている。「魚ですか、人間ですか」「好きな食べ物は何ですか」などの質問に答えてくれている。SNSでも話題となり、県外から輪之内町へ足を運ぶ人も多い。

牧野柳平氏の町への貢献は、今も続いている。

【参考文献】
郷土の輝く先人(下巻)
ふるさと輪之内